

絨毛性疾患の up-date

新美 薫 / 山本 英子

Summary

絨毛性疾患は異常妊娠の1つである胞状奇胎と、主に侵入奇胎と絨毛癌を含む妊娠性絨毛性腫瘍(GTN)で構成されている。日本では近年の少子化による出生数減少に伴い、絨毛性疾患の絶対数は減少しているが、ここ10年は発生率が上昇傾向を示しており、胞状奇胎や続発症のリスク因子である母体年齢の高齢化が影響していると考えられる。今回は絨毛性疾患における最近の報告を概説するが、あくまで現時点での取扱いは、規約やガイドラインに則って行うことが肝要である。

Key words

妊娠性絨毛性腫瘍(GTN)

胞状奇胎

侵入奇胎

絨毛癌

はじめに

絨毛性疾患は、胎盤組織から発生する一連の良性および悪性腫瘍である。日本産科婦人科学会婦人科腫瘍委員会の絨毛性疾患地域登録成績では絨毛性疾患の約80%は胞状奇胎であり、これは腫瘍とはみなさず、異常妊娠と位置づけられている。また、胞状奇胎以外の絨毛性疾患は妊娠性絨毛性腫瘍(gestational trophoblastic neoplasia : GTN)と総称され、その約85%が侵入奇胎となっている。GTNには必ず原因となる妊娠(責任妊娠)があり、それが必ずしも直前の先行妊娠であるとは限らない。

『絨毛性疾患取扱い規約』は2011年に、『子宮体がん治療ガイドライン』は2018年に改訂され、その後多数の研究が報告されているが、一般的な知識や診断方法に大きな変化はない。取扱い規約などに記載されている基本的な事項を十分理解したうえで、最新の報告に注目していく必要がある。本稿では、絨毛性疾患の一般的な知識とともに最近の報告を含めて概説する。

絨毛性疾患の頻度

絨毛性疾患の頻度は欧米に比べてアジアで高く、胞状奇胎の発生率は東南アジアおよび日本ではおおむね1~2/1,000妊娠(または出生)である¹⁾⁻³⁾。2018年の日本での胞状奇胎発生率は、22地域の絨毛性疾患地域登録成績(日本産科婦人科学会婦人科腫瘍委員会)では1.69/1,000出生となっ

Kaoru Niimi

名古屋大学医学部産婦人科講師

Eiko Yamamoto

名古屋大学医学部医療行政学准教授